

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：30116

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02861

研究課題名(和文) 中・高生の日英バイリテラシー発達に関する縦断的研究

研究課題名(英文) A longitudinal study on how secondary school students develop biliteracy in Japanese and English

研究代表者

佐野 愛子 (Sano, Aiko)

札幌国際大学・観光学部・教授

研究者番号：20738356

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：2017年度及び2019年度にイギリス・オランダにて継承語教育を行っている家庭9家庭に対するインタビューを行い、補習授業校における授業参観を行った。同時に、ヨーロッパ日本語教育学会およびカーディフ大学で行われた日本語教育の研究会に参加し、欧州における日本語教育の現状について理解を深めるとともに、今後の研究に参加可能な拠点を開拓した。

収集できたデータの一部について分析を終え、ニューカッスルで行われた英国日本語教育学会にて「高度バイリテラシーを支えるために親たちがしていること：カナダとイギリスの継承語家庭の比較を通じて」のタイトルで研究発表を行った。この発表の成果は現在論文として準備中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、高度バイリテラシー育成のモデルケースの家庭に対するインタビューの質的分析を行い、バイリテラシーの育成に資する環境的な要因について、暫定的なモデルを作成した。母語話者としての母の願いとともに、教師としての母親の経験などのミクロな要因に加え、家族を取り巻く環境がバイリンガルでの子育てに対し支援的であるかないかという要因、子育て全般に対する社会的規範やホスト社会における言語教育の制度などのよりマクロな要因の重要性も示され、それらの要因が実際の家庭における取り組みに影響していることが示唆された。今後の研究ではこのモデルを土台をより精緻化することを目指し、さらに具体的な教育的示唆につなげたい。

研究成果の概要(英文)：I interviewed 9 families with heritage language learners in the U.K. and the Netherlands in 2017 and 2019, and also observed classes at Hosityuko, a supplementary Saturday Japanese school in the U.K. I also attended the 23rd Japanese Language Education Symposium in Europe as well as a study meeting for Japanese heritage language families held at Cardiff University, learning the present situation in Japanese heritage language education in the European context while recruiting prospect participants in the future study.

A part of data obtained has been analysed and the findings from the analysis was presented at the 22nd BATJ (the British Association for Teaching Japanese as a Foreign Language) annual conference under the title of "What parents do to support the development of high level biliteracy in children: Comparing heritage language families in Canada and the UK", which is now being prepared in the form of a manuscript.

研究分野：バイリンガル教育、バイリテラシー、英語教育

キーワード：Family Language Policy バイリテラシー バイリンガル教育 継承語教育 リテラシー

1. 研究開始当初の背景

外務省の海外在留邦人数調査統計報告によると平成 29 年 10 月時点において、日本国外に在留している学齢期にある日本人の児童・生徒は 82,571 名であって、移民の時代と称されるような世界規模での人口の流動化に伴い年々増加し続けている。しかし、改めて指摘するまでもなく、学齢期を多言語環境で過ごすことが自動的にバイリンガルになることを保証するものではなく、特に滞在年数が長くなればなるほど、継承語をどのように保持・発達させるのか、という点が大きな課題となってくる。その中で、日本語と英語のように書字体系が大きく異なる言語の組み合わせにあっては、子どもたちの学習負担が多くなることを懸念してリテラシーの習得についてはあきらめてしまう場合も少なくない。しかし、他方、カナダの補習授業校で行われた日英作文力の発達に関する研究 (Sano 他, 2014; 佐野, 2016) では、カナダ生まれの児童・生徒の中にも高度な日英のバイリテラシーを開花させたものも少なくないことが示されており、バイリテラシーの発達における個人差は第二言語習得における個人差の中でも際立っていると指摘できる。翻ってバイリテラシーの育成はバイリンガル教育、継承語教育の成功のために極めて重要な基盤である (Cummins, 2008 など) ことを鑑みれば、高度バイリテラシー育成に資する要因の特定は喫緊の課題であるといえる。本研究はそうした社会的な要請に応えることを目的に計画されたものである。

2. 研究の目的

本研究は、「日英バイリンガルの中・高校生の二言語における書く力はどのように関係しあい、滞在年数・母語を離れた環境及び家庭使用言語及び現地校・継承語教育機関などにおける作文教育などの要因はその発達にどのような影響を与えるのか」という大きな研究課題の事前準備としての小規模調査を目的として計画された。本研究で具体的に組みたいと設定した課題は以下の 4 点であった。

保護者及び本人と面談し、主研究で行うバイリテラシーの発達を支える家庭環境を特定するための半構造化インタビューの項目を抽出する。

在外補習授業校の教員などに面接調査し、主研究における授業観察で重点的に観察する項目を抽出する。

補習校生徒が通学する現地校の教員が CLD 児に対する作文 (英語) の授業において留意していることについて面接調査を行う。

北米・ヨーロッパ及び国内の日英バイリンガル児童・生徒がおかれた環境における作文教育について概観する。

3. 研究の方法

研究課題の 1 に関しては、日本語を継承語として子どもに学ばせているイギリス南部の 3 つの家庭、イギリス北部の 3 つの家庭、及びオランダの 3 つの継承日本語家庭の保護者にインタビューを行い、そのデータの一部 (イギリス) について大谷 (2008, 2011, 2019) で提案された質的データ分析の手法である SCAT を用いて分析した。この分析方法では、まず、セグメントに分けたテキストを以下の手続きに従って脱文脈化する。

- 1 データの中の着目すべき語句を 抜き出す
- 2 データ外の語句 によって 1 で抜き出した語句を言いかえる
- 3 理論的 概念 や語句を用いて 2 で得られた語句を説明する
- 4 3 までのプロセスにおいて浮上する テーマ・構成概念を 記述 する
- 5 新たに浮かび上がった 疑問・課題を 記録する

そのうえで、この手筒気によって抽出されたコードを再文脈化することで物語としての「ストーリーライン」を紡ぎ、それを抽象化させることによって命題や定義のように端的に表現される「理論記述」へとつないでゆく。

この手法を用いた分析結果について、2014~15 年に行った先行研究 (研究活動スタート支援: 課題番号 26884042) の成果として発表したカナダのケースとの比較を行った。研究課題の 2 については、イギリスの補習授業校の教員 2 名に対するインタビューを行い、加えて授業観察 (国語科・3 時間) を行った。研究課題の 3 については、実質的に研究に協力してもらえぬ現地校教員を見つけられず、実施することはかなわなかった。研究課題 4 については、主に文献整理を行うことで継承語教育におけるリテラシーの指導について概観した。これらの研究から得られた成果について次項にその概略を説明する。

4. 研究成果

研究課題 1 に関わるまとめ

イギリス南部の国際結婚家庭の日本人母へのインタビュー結果の詳細な分析 (論文準備中) を踏まえ、カナダで行った先行研究 (佐野, 2016) との比較結果を以下に示す。

佐野(2016)の研究では、4人の日本人母のインタビューの分析から、合計99のコードが得られ、その中に以下に示す7つのコンセプトが共通して浮上している。

- 家庭における言語使用に関わるルール
- 母親のピリーフを形成した学習者及び教師としての経験や専門知識
- 継承語における高度な語彙習得のための具体的方策
- 高度バイリンガル発達を目指すにあたってのL2習得に関わる支援
- 情意面での心配り
- 補習校に対する肯定的評価
- バイリンガル子育てに対する周囲の支援的態度

今回の分析したインタビューデータからは50のセグメントを得たが、この結果を佐野(2016)と照らし合わせてみたところ、上記7つのコンセプトに対応するものがほぼすべて見つけられた。イギリスにおける高度バイリテラシーを持つ文化的・言語的に多様な子ども(Culturally and Linguistically Diverse Child, 以下CLD児)の母(以下Aさん)の語りにも、カナダにおける語り同様、「日本語話者の母とは日本語を使用する」という明確なルール(Family Language Policy, 以下FLP)が存在していた()。また、Aさんの補習校及び地元の学校で日本語を教えている経験()は漢字学習の重要性に関わるピリーフの形成()や、漢字の習得に対する現実的な目標の設定など()として表出していた。同時に、同じく言語の教育に携わっている夫もAさん自身も読書好きであることもあって、小さいうちから徹底的に日英二言語での読み聞かせを行ってきたと述べ、それが文系の学習志向を持つ息子の英語のリテラシー形成に寄与しただろうと考えている()。補習校に対しては、その授業実践、図書館の機能、子どもたちの学習の共同体としての場など、多くの意義を認め、高く評価している点においてもカナダにおける研究との共通性を見せている。また、夫や義理の両親の日本及び日本語を用いたバイリンガル教育に対する肯定的な態度や、周りの友人などの理解があったことについても繰り返し言及し、周囲の支援的態度がAさんのバイリンガル子育て成功において不可欠だったことを示している()。

Aさんの語りは以上のように、カナダにおける先行研究で浮上したコンセプト全てを含むものであったが、カナダでは見られなかった別のコンセプトも浮上してきた。それは、「親のピリーフの土台としての理想」「親のピリーフに影響する子育てに関わる社会規範」「ホスト社会の教育制度」「リテラシー育成のための具体的方策」の四つである。としては、半分日本人である息子に対する日本語を話せるようになってほしいという「基本的」で「シンプル」な願いが語られていた。こうした語りは、カナダでの先行研究では特に浮上しなかったものの、CLD児を育てる親たちの語りには多く見られるものであるだろう。Aさんの語りで非常に特徴的だったのは、子育てにおける子どもの意思の尊重の重要性というイギリスの社会規範を日本人の母たちも内在化させている、という叙述である。学年が進むにつれ、スポーツなどほかの活動と継承語保持との両立に悩む子どもたちと親の葛藤については多くの語りで浮上してくるが、Aさんは自分も、自分の周りの母親もその決定を子どもにゆだねていることを強調し、その背後にあるイギリスの社会規範を指摘している。また、Aさんの語りの中で特に印象的だったのは、教師としての自分の経験()を子どものリテラシー発達のための具体的な方策として積極的に活用していたことである()。例えば、それは子どもの日本語リテラシーを育成する支援を惜しまない一方で、子どもは英語で本を読み、母が同じ本を日本語で読んだうえで日本語で話し合う、というストラテジーとして、また、継承語学習者のニーズに合わせ、高度な内容でありながら言語的な難易度が低く、視覚的な情報にも優れた本を選ぶという選択基準として浮上してきた。これは、カナダの研究の成果と合わせ、「継承語リテラシー促進の方略」と「マジョリティ言語のリテラシー促進方略」とわけることができるだろう。同時に、Aさんの教師としての経験が、社会規範を内在化することで培われた子どもの意思を尊重する姿勢を強化し、子どもが持てる言語資源を最大活用して話すtranslanguagingを容認するなど、柔軟な方針で子どもの継承語学習意欲を逡巡させないための工夫()にもつながっていた。Aさんはまた、現地校と補習校の入学時期のずれや、現地の大学進学に日本語の成績が有利に働くなどの教育制度上の要因がうまく作用したことに

も言及している。

カナダでの先行研究との比較という形でAさんのインタビュー結果を詳細に分析した結果、ミクロまたマクロな要因が互いに影響しあってAさんの子育てにおけるバイリテラシー育成に寄与したことが見えてきた。これらの要因の関係性を暫定的なモデルとして図1に示す。

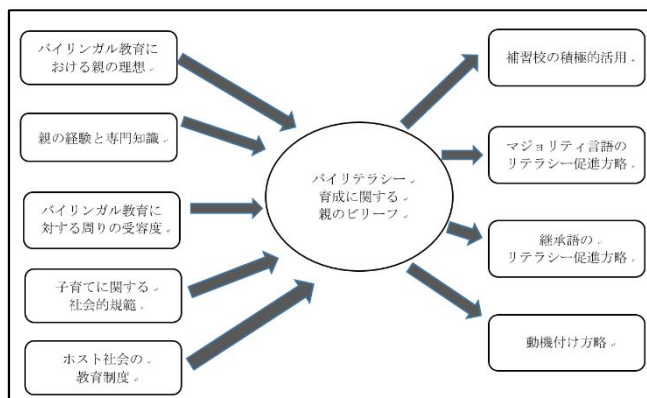


図1：バイリテラシー育成に資する要因とその関係性(暫定モデル)

研究課題 に関わるまとめ

2019 年度夏に行ったイギリス北部の調査では、補習校の授業観察を許され、国語の時間を 3 時間にわたって参観する機会を得た。ただし、この調査では録画は許されなかったため、詳細な分析を行うことはできなかったが、その観察より、教師の生徒への発話における日英二言語の使用について、生徒対教師の発話における日英二言語の使用について、そして生徒間のやり取りにおける日英二言語の使用について、その現象とそれに関わるそれぞれの言語観を分析することで、より効果的な継承語指導について考えるきっかけになるのではないかと感じるを得た。この分析については、佐野・田中 (2019) で、バイリンガルろう教育の文脈で提案した授業分析スキーム BOLT が活用できるのではないかと考えている。

研究課題 に関わるまとめ

前述したように、この部分については、研究に協力してもらえる現地校の教員を見つけられず、研究を進めることはできなかった。今後の研究における課題として残したい。

研究課題 に関わるまとめ

本研究では、勤務校の状況やコロナウィルスなど諸般の事情で予定していたデータ収集や発表に関わる活動が完結できなかった部分もあった。しかしその分を予定以上に文献研究に充てることができたのは今後の研究の発展の上で大きな成果であったと考える。以下、その概略をまとめる。

Smith-Critsmas (2016) によれば、Family language policy (FLP) という用語を初めて用いたのは Luykx (2003) であるという。FLP とは複数言語環境での子育てにあたって親がどのような実践を行っているか、その根底にあるピリーフに焦点を当てて分析する学問領域である。特にそうしたピリーフが社会文化的なシステムの中でどのように位置づけられているのか、そしてそうしたピリーフがどのように家庭における言語実践に結び付いているのかという点に分析の主眼が置かれる。と同時に、こうしたピリーフに基づく実践がどのように子どもたちの言語習得に資するのか(またはしないのか)という点についても研究するものである (King et al., 2008; Schiffman, 1996; Shonamy, 2006; Smith-Christmas, 2016)。King et al. (2008) は FLP 研究が言語政策研究と第二言語習得研究の接点に位置づけられ、継承語教育研究においては特に重要な視座を提示すると指摘している。

FLP の中でも最も広く言及されているものに OPOL (一親一言語) がある。Smith-Christmas (2016) によれば OPOL について初めて言及したのは Grammont (1902) であるという。その後、このストラテジーは両親のうち一方が社会のマジョリティ言語を話す家庭での実践 (e.g., De Houwer 1990; Döpke 1992; Kasuya 1998; Takeuchi 2006; Taeschner, 1983) として、また両親ともに社会のマイノリティ言語を話す家庭の実践として (e.g. Hoffman, 1985) 分析されてきた。特に後者の場合、その多くは両親の母語を用いるものであるが (e.g., Fantini, 1985; Kouritzin, 2000) 中には母語以外の社会的地位が高いとみなされる言語を用いたもの (Saunders, 1983.; 湯川, 2000) や、ろうバイリンガル家庭の聴の親の実践のように親自身にとって新しく獲得する言語で実践されるもの (Pizer, 2013) など様々な文脈において研究されている。

OPOL の実践が子どもの言語発達に資するか否かという点については、研究の結果は一定ではない。継承語のインプットの多寡がその結果に影響する (e.g., Döpke, 1992; de Houwer, 2007) という報告や、親の OPOL の一貫性の度合いが影響するとするもの (Takeuchi, 2006) などがある。とりわけ後者については、多くの親が一貫性をもって OPOL を実践できていないことが報告されている。これは (Danjo, 2015) が指摘するようにマルチリンガルな家族にあっては、妥協を許さず OPOL を実践することは実際不自然であるためだろう。García and Li Wei (2014) が強調するように、バイリンガルは日常的にトランス・ランゲージするものであって、持てる言語資源を最大限に活用するような言語使用それ自体が自然なバイリンガルの発話だと考えられるからである。家庭内における継承語のインプットの量についての研究からは、同一の家庭内においても兄弟間でそのインプットの量に差がありうるということが報告されている。多くの場合、年長児の方が年少児に比べてインプットの量が多いことが報告されているが (e.g. Dumanig et al., 2013) その一方で、年長児がより年少の子どもに対し継承語保持を助けるためのインプットをする例なども報告されている (Yates & Terraschke, 2013)。また、継承語の保持・発達には継承語のインプットの量ではなく質が影響する、という報告 (e.g., Lanza, 1997; Mishina-Mori, 2011) もあり、とりわけバイリテラシーの保持・発達に注目する本研究にとっては意義深い報告と思われる。

より近年の研究では、言語にかかわる親のピリーフがどのように形成されているのかという点に焦点を当てているものが多い。これは、継承語の保持・発達においては子どもがごく年少の時期から始められるため、親の関与する度合いが極めて大きいからである (Schwartz & Verschik, 2013)。この点について King and Fogle (2006) はバイリンガル FLP を実践する 24 の家庭を対象に分析した結果、一般的に読まれている書籍に提示されている情報、(祖父母世代、

叔父・おばなどの親戚を含めた) 拡大家族の経験、及び両親の経験が両親のピリーフに大きな影響を与えていることを報告している。

家族を取り巻く環境についてはオーストラリアの日英バイリンガルの家族 10 家庭を対象に行った Oriyama (2016) の研究が参考になる。この研究では周りに継承語のコミュニティがある家族と孤立した環境にある家族が比較されており、コミュニティの中にある家族の方が継承語保持に有利であることが報告され、周りの社会的環境が FLP に与える影響の強さが示唆された。

ここまで概観したように、FLP に関わる研究が一定程度蓄積しつつあるのに対し、バイリテラシー育成にかかわる FLP に関する研究はいまだ極めて少ない現状である。ただ、参考になるものとして、FLP というコンセプトを直接的に扱っているわけではないが、柴山他(2016, 2019) の研究がある。これらの研究はドイツ在住の独日バイリンガル家庭におけるバイリテラシー育成についてのものであり、2016 年の研究では「現地校での学習や交友関係に傾斜し始める 2 年生頃、中等教育学校への進学が大きくなる 4 年生頃、ギムナジウムでの勉強の繁忙化と母親への反発が重なる 6 年生頃」(p.365) に補習校での学習の継続に関わる危機的状況が訪れることが報告され、さらに「幾層もの協働」p.365 によってこれらの家族がそうした危機を乗り越えていくことが観察されている。また、2019 年の研究では、「生態学的システム」の修正モデルをその枠組みとして用いながら、マジョリティ言語のネイティブスピーカーである父親と子ども、継承語のネイティブスピーカーである母親と子ども、及び父母間の調整がどのように行われているか詳細に報告されている。これら参照すべき研究が積み上げられてきているが、バイリテラシーに関わる親のピリーフがどのように形成され、それがどのように子どもの言語発達に資するのか(またはしないのか)という点についての研究は未だ蓄積が少なく、現在準備中の論文を含めこれからの研究で明らかにしていく意義があるものと考えている。

主要な参考文献

- 佐野愛子 (2016) 「金の卵を潰さない：高度バイリテラシーを支えるために親たちが家庭でしていること」*HELES Journal*, 16, 35-50.
- 佐野愛子・田中瑞穂 (2019) 「バイリンガルろう教育における教育手法としてのトランス・ランゲージング：授業分析スキーム BOLT の開発」『母語・継承語・バイリンガル教育研究』第 15 号, 55-75.
- 柴山真琴・ビアルケ (當山) 千咲・高橋登・池上摩希子 (2016) 「子どもの言語習得とグローバル時代のインターフェイス：海外居住の国際家族におけるバイリテラシー実践を手掛かりに」『発達心理学研究』第 27 巻第 4 号 357-367.
- 柴山真琴・ビアルケ (當山) 千咲・高橋登・池上摩希子 (2016) 「現地校・補習校の宿題支援における家族間の調整過程：独日国際家族の事例に基づいて」『人間生活文化研究』第 29 号 236-256.
- Danjo, C. (2015). A critical ethnographic inquiry into the negotiation of language practices among Japanese multilingual families in the UK: Discourse, language use and perceptions in the *Hoshuko* and the family home. *Doctoral thesis, Northumbria University*.
- de Houwer, A. (2007). Parental language input patterns and children's bilingual use. *Applied Psycholinguistics*, 28, 411-424.
- García, O., & Li Wei. (2014). *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. Palgrave Macmillan.
- King, K. A., & Folge, L. (2006). Bilingual parenting as good parenting: Parents' perspectives on family language policy for additive bilingualism. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 9(6), 695-712.
- King, K. A., Folge, L., & Logan-Terry, A. (2008). Family language policy. *Language and Linguistics Compass*, 2, 1-16.
- Luykx, A. (2003). Weaving languages together: Family language policy and gender socialization in bilingual Aymara households. In R. Bayley & S. Schecter (Eds.), *Language socialization in bilingual and multilingual societies* (pp. 10-25). Multilingual Matters.
- Mishina-Mori, S. (2011). A longitudinal analysis of language choice in bilingual children: The role of parental input and interaction. *Journal of Pragmatics*, 43, 3122-3138.
- Oriyama, K. (2016). Community of practice and family language policy: Maintaining heritage Japanese in Sydney-Ten years later. *International Multilingual Research Journal*, 10(4), 289-307.
- Sano, A., Nakajima, K., Thomson, H., Fukukawa, M., Ikuta, Y., Nakano, T. (2014). Writing abilities of grade 1-9 Japanese-English bilinguals: Linguistic interdependency and AGE, LOR and AOA. *Studies in Mother Tongue, Heritage Language, and Bilingual Education*, 10, 60-90.
- Smith-Christmas, C. (2016). *Family language policy: Maintaining an endangered language in the home*. Palgrave Macmillan.
- Schwartz, M., & Verschik, A. (Eds.). (2013). *Successful family language policy: Parents, children and educators in interaction (Vol. 7)*. Springer Science & Business Media.
- Takeuchi, M. (2006). The Japanese language development of children through the 'one parent-one language' approach in Melbourne. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 27(4), 319-331.
- Yates, L., & Terraschke, A. (2013). Love, language policy and little ones: Successes and stresses for mothers raising bilingual children in exogamous relationships. In M. Schwartz & A. Verschik (Eds.), *Successful family language policy* (pp. 105-125). Springer.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 佐野愛子
2. 発表標題 高度バイリテラシーを支えるために親たちがしていること カナダとイギリスの継承語家庭の比較を通じて
3. 学会等名 The 22nd BATJ Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----